

サヤエンドウ (露地) (黒ボク土)

〔土壤肥料〕

本作目は、栄養生長と生殖生長が同時に進行する型である。窒素をはじめ養分を生育後期まで供給する必要があり、収穫後の土壌には養分が残存しやすい。根粒の着生はあるものの、連作すると根粒による窒素供給はあまり期待できない。このため、窒素については、生育初期から収穫後期まで肥効を保つような施肥が必要である。

〔病害虫・雑草防除〕

土壤病害対策として連作を避け、排水を良好に保つ。過度の密植と適切な整枝を行い過繁茂を避け、風通しを良好にするように努める。育苗期には防虫ネットによる被覆等を行い、害虫の被害を回避する。病害虫の早期発見に努め、適期防除で化学農薬の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点に立った投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。	堆肥 1～2t/10a
化学肥料 低減技術	基肥は局所施肥(条施肥など)を基本とし、茎数がある程度確保できる量に留め、追肥型の施肥法をとることを基本とする。 肥効調節型肥料を利用する。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で施肥基準以下 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20～50%
化学農薬 低減技術	B T剤をローテーション散布に位置づける。 (対象：ハスモンヨトウ) 光反射マルチを利用する。 (対象：アブラムシ類、ウイルス病、雑草など) 生育初期に防虫ネットによる被覆を行う。 (対象：アブラムシ類など) 被覆資材により雨よけ栽培を行う。 (対象：褐斑病、褐紋病など) マルチ栽培を行う。 (対象：雑草など)	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	開花期からの適量の窒素の追肥は、増収につながる。 残存養分の多い圃場では、堆肥を通常量施用し、減肥に心がける。 子づる数は土壌中の有効態リン酸量に関連する。 根域が比較的深くまで発達するので、高畝とし排水性を確保する。 水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。 溶脱防止のためマルチ栽培とする。 連作を嫌う作目であることに留意する	

サヤエンドウ (施設) (黒ボク土)

〔土壌肥料〕

本作目は、栄養生長と生殖生長が同時に進行する型である。窒素をはじめ養分を生育後期まで供給する必要があり、収穫後の土壌には養分が残存しやすい。特に施設では残存養分の過剰な蓄積を回避する必要がある。根粒の着生はあるものの、連作すると根粒による窒素供給はあまり期待できない。このため、窒素については、生育初期から収穫後期まで肥効を保つような施肥が必要である。

〔病害虫・雑草防除〕

土壌病害対策として連作を避け、排水を良好に保つ。過度の密植と過繁茂を避け、適切な整枝を行い、風通しを良好にする。特にうどんこ病、灰色かび病対策に施設内の過湿には十分注意する。育苗期には防虫ネットによる被覆等を行い、害虫の被害を回避する。本圃では適期防除を行い、化学農薬の使用削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点に立った投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。	堆肥 1~2t/10a
化学肥料 低減技術	基肥は局所施肥(条施肥など)を基本とし、茎数がある程度確保できる量に留め、追肥型の施肥法をとることを基本とする。 肥効調節型肥料を利用する。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で施肥基準 以下 有機質肥料併用の 場合には化学肥料 低減率20~50%
化学農薬 低減技術	B T剤をローテーション散布に位置づける。 (対象:ハスモンヨトウ) 天敵農薬を利用する。 (対象:ハモグリバエ類、アブラムシ類など) 微生物農薬を利用する。 (対象:うどんこ病、灰色かび病など) 夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 (対象:土壌病害虫、雑草など) 光反射マルチを利用する。 (対象:アブラムシ類、ウイルス病、雑草など) 流滴性被覆資材を利用する。 (対象:灰色かび病など) 近紫外線除去フィルムを利用する。 (対象:灰色かび病、ハモグリバエ類など) 開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象:アブラムシ類、ハモグリバエ類など) マルチ栽培を行う。(対象:雑草など)	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	開花期からの適量の窒素の追肥は、増収につながる。 残存養分の多い圃場では、堆肥を通常量施用し、減肥に心がける。 子づる数は土壌中の有効態リン酸量に関連する。 根域が比較的深くまで発達するので、高畝とし排水性を確保する。 水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保を図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。 溶脱防止のためマルチ栽培とする。 連作を嫌う作目であることに留意する。 日照条件、風通しを考えると、単棟ハウスが望ましい。	